むつ小川原開発関連海域温排水等影響調査

（要　約）

植木　龍夫・仲村　俊毅・早川　豊・五十嵐照明

Ⅰ　潮間帯生物調査

調査方法

1）調査年月日：昭和51年7月24～26日、昭和51年9月21～23日及び昭和52年3月22～23日の3回
2）調査地点：上北郡六ケ所村出戸前浜から三沢市天ケ森前浜までの8点
3）採集方法：干潮時に方形鉄枠を砂面に打込んでその内側の砂を採集し、篩で篩分け後ホルマリン固定して持帰った。
4）種の同定と計数：多毛類の同定を北大水産学部助手、中尾繁氏に依頼した。

調査結果

3回の調査でシキシマフクロアミ、ヒメスナホリムシ、ハマトビムシ類、ハマダンゴムシ、多毛類、腹足類、コタマガイ、ヒサシソコエビの8種類が見られた。そのうち前の3種類はいずれの調査時にも見られ、出現個体数も多かった。

考察

潮間帯の幅の時期による変化は、打寄せる波の大きさと潮位差の影響によるものと思われ、潮間帯生物の分布域にもこれに対応した変化が見られた。

Ⅱ　底生生物調査

調査方法

1）調査年月日：昭和51年10月16～18日
2）調査地点：上北郡六ケ所村新納屋前浜を基点として南北に3㎞以内、沖合へ2㎞以内の52点
3）採集方法：潜水によりチリトリ型の採集器にナイロンネットをかぶせて定量採集した。採集物はホルマリン固定して持帰った。
4）種の同定と計数：種の同定と計数は多毛類を北大水産学部助手　中尾繁氏に、二枚貝類を函館市立博物館長　石川政治氏に依頼した他は水産増殖センターで行なった。

調査結果

この調査で得られた出現個体数は3,682個体、種類数は62であった。単一種で多かったのは、キサゴ、ハスノハカシパン、マルソコエビの3種で出現個体数の半分以上を占めていた。また、多毛類は出現個体数の1／3以上を占めていた。

調査の詳細は、近日中に県漁政課で「むつ小川原開発関連海域　温排水等影響調査結果報告書」として印刷される予定であるので、こゝでは担当分の概要のみを記載した。